



## 解答

## I 出典 尾崎一雄「瘦せた雄鶏」

**問一** 死期が近いと感じている緒方にとって、来年病気が治った父と海に行くという幼い娘の夢は、父としての喜びを感じさせる半面、実現が難しく少しでも生き続けてやらねばならないという精神的苦痛や重荷を感じさせるから。

**問二** 自分の死を前にした緒方が、生命に充ちあふれた家族たちに気付かれないようにひそかに作っている、人間の生死にまつわる根源的な問題について真剣な考えをめぐらすことのできる、自分だけの心の世界。

**問三** 今まで当たり前のものとして素通りしてきた「自分は何で生まれ、生き、死ぬのか」という人間の根本に関わる死生観を、病にかかり自らの死を現実のものとして目の前にしたために、新たに思い知らされたという事態。

**問四** 自らの死を目前にしても、何に対しても堂々と立派に対峙し、困難を克服し、文学への野心も捨てずに家族のためにも生きようとする雄々しい意気込みと自負のこと。

## II 出典 米原万里「前門の虎、後門の虎」

**問一** 同時通訳は本来、二つの異なる文化的背景の橋渡しをする役割を持つのだが、ロシア人に、ロシア改革の現状を日本の大政奉還や廃藩置県に例えて表現した日本人学者の発言を伝えるのは、文化も歴史的な背景も違い、時間的な制約もあって非常に困難だと思ったから。

**問二** 同時通訳者は、発言者の言葉の全部を訳そうとしたり、どうでもいい枝葉末節にこだわったりするのではなく、分かった内容の要点を的確に把握し、余分な表現を出来る限り排除して、かつ、発言者の大切な情報の量を減らさないように通訳をするといふ。

**問三** もともと話すスピードが速くないことを苦にしていた筆者にとつて、分かるところだけ訳せという徳永師匠が与えてくれた助言により、何とか初めての通訳を無事に終え、今までしなかった、大切な情報だけを伝えるという省略という通訳の本質に目覚めさせてくれるものであったから。

## III 出典 「苔の衣」

**問一** 「この返歌を早くなさいませ」と内大臣がうながし申し上げなされると、姫君はますます気恥ずかしそうに思っただけだったけれど、

**問二** 姫君の御筆跡なども見事で、将来の成長ぶりが自然と想像されるということ。

**問三** 母上が亡くなり垣根は荒れて、訪問する人もいなくなってしまうた私にも、なでしこに置いた露がこぼれるように、寝ても覚めてもいつも涙がこぼれることだ。

## 解説

## I

**問一** 傍線把握・心情の説明の問題。傍線部中の指示語、「これ」がどこを受けているかをまずとらえる。指示語は直前の「父親と二人で国府津の海岸に行く」という「病

む父親にかける夢と希望」を指している。そして傍線部直後、「死ぬにも死ねない」という緒方の感想に繋がる。なぜ緒方は「死ぬ」ことを想定しているのか。読み進めていくと傍線(3)の直前に、「自分が病気になる、どう考えても余り長い命ではない」という記述が出てくる。つまり、緒方は自分の死を意識しているのだが、娘の「夢と希望」に応えられそうにないので、「がんじがらめだ」、そして、「死ぬにも死ねない」と感じるのである。小説を読解する際には、登場人物の「心情の推移」を追うことが重要である。緒方は「死ぬに死ねない」状況をどう思っているかを、しっかりと把握しなければならぬ。傍線直後で「溜息をつく」という記述が出てくる。つまり、嘆いているわけなのだが、「一方彼は、自分の例の雄鶏気分が多分にくすぐられることを意識する」という部分にも着目しなければならない。娘の夢や希望が重荷になっていることだけを書いたのでは充分ではなく、緒方の父親としての愛情、娘に期待されていることへの自尊心・喜びといったものを解答のなかに書かなければならない。

**問二** 比喩の説明。傍線中の「誰にものぞかせない小さな部屋」とは、比喩である。「比喩は具体に直す」が、小説読解の鉄則である。傍線直前に、「自分の中に」と書いてあるのだから、この小部屋は、彼が家族には見せない心の中だとわかる。そのあと、死を意識した緒方が、「自分というものは何で生まれてきたのか、何故生き、そうして何故死ぬのか」という疑問を抱くようになった経緯が語られる。しかし「自分のこんな状態を、家族たちの誰に話そうと、まるで無益なことを彼は知っている」という記述のあと、「緒方は、いのち、あるいは生というものについて、納得したいのだ。ただそれだけの、至極簡単なことなのだ。そしてそれは、自分で納得するより外、仕方がない。そのことは、ただ一人でしか向かい合うことが出来ず、その作業はただ一人でしか出来ない」と続く。これらの記述を要約すれば答えとなるのだが、その際に、なぜ緒方が家族に明かすことなく、心の中に小部屋を持ったのかを明確に書き込むこと。家族のことを、「天真らんまん、若い、生命に充ち溢れた人間たちに、それが通じようはずはない」と書いている通り、死を意識する緒方と、家族の間には明白に、その死生観には距離があるのである。

**問三** 意味内容の説明問題。傍線中「判り切ったこと」とは何か、をまず考える。「こと」というのは、「指示語の代用」である。だから直前のどこを具体的に指しているのかを考えればよい。傍線の前をさかのぼっていくと、「自分というものは何で生まれてきたのか、何故生き、そうして何故死ぬのか」というのが、「判り切ったこと」の具体であることが理解される。緒方は「自分の死」を直前にして、いっそう痛切に「生とは何なのか」をあらためて考えるようになった、というのである。記述のポイントは、①「判り切ったこと」の意味内容を、明確に書くこと。②それがなぜ「判り切ったこと」でなくなったのか、その「理由」をあきらかにすること、の2点である。



問四 「雄鶏精神」という比喩が、具体的には何を意味するのかを考える。問一で暑かった傍線(1)の直後にも出てくる「雄鶏気分」という比喩と、同じ意味である。「雄鶏気分」のほうは、娘にたいして病気が治つてやるからなと心の中で誓つてみせることからわかるとおり、父性であり、男としての強い自覚である。問題文は、「本文全体を踏まえて説明せよ」とあるので、傍線(5)の直前後だけでなく、全体を要約した記述が必要とされる。以下の三つのポイントを明記すべし。①「雄鶏精神」の説明を、傍線直後の鶏小屋にいる雄鶏の描写、「気負い方」「立派で、堂々としている」などの言葉遣いを参考に、「雄々しい父親像・男性像」として記述すること。②「雄鶏」の役割が、病気を克服する父親としての自らに重ねられているとあり、困難に立ち向かうものであること。③作家としての緒方は、単純な家族思いの父親という役割にはとどまらず、文学に関しても、「未だ野心と色気が残っている」と記述されている。

## II

問一 理由説明の問題。「往生する」とは「どうしてよいかわからなくなつて困ること。処置に困ること」である。通訳者である作者が、日本人の学者の発言を通訳するうえで、どうして困つたのか、その理由を説明すること。まず、同時通訳というものの困難さが、冒頭から述べられている。その困難な理由は、①異なる文化圏の人たちの言葉を訳す以上、お互い文化的な背景を、通訳しながら補つてあげなければならないこと。②ただし、そこにはかなり時間的な制約があること。この二つを記述のなかに明記しなければならない。さらに、直接には触れられていないが、日本人学者の言葉が「問題発言」であることも、読み取る必要がある。最近のロシアの改革を、日本の大政奉還や廃藩置県という、前時代的なものに例えたと言う事は、ロシアの改革がおおいに遅れているというニュアンスを含んでいる。これをそのまま伝えることは、誤解を招きかねない。そういう懸念も、作者を往生させたのである。解答は、日本人学者の言動の是非についてまでは言及しないようにした。作者ははっきりと、文中で日本人学者の発言に対する評価を述べていないからである。また、「大政奉還と廃藩置県」というように、固有名詞をそのままのかたちで引用した。「歴史的事実」としたのはこれが問題発言であると伝わりにくいし、「前時代的」「遅れている」といった言葉を使うと誤読に繋がりがかねない判断したからである。

問二 タイトルともなっている「前門の虎、後門の狼」は故事成語で「前の門で虎の侵入を防いでいると、後ろの門から狼が入ってくる」という意味。同時通訳者は「二つの異なる文化の溝を埋めろ、そして適宜、語句の上では表現されない文脈を補え」とも、「時間をできるかぎり短縮しろ」とも要求される。そのアンビバレンツ(二律背反)な、矛盾した状況に対処するためには、具体的にはどのようにするのかを書くことが問われている。この設問は比較的答えやすく、ヒントになる箇所を列挙していくと、①傍線部の

後の、師匠の徳永氏の発言、「全部訳そうと思うから大変なんだ。分かんるところだけ訳していけばいいんだよ」そして結論部、②「残る手段は、省略。余分な言葉を極力排除する以外にない」③「どうでもいい枝葉末節にこだわって、大事な情報を落とすてしまふようでは困る」以上三点を、洩らさずに記述すること。一般的な通訳といえば、話者の会話を逐一訳していくものだという一般的な通念があるが、作者はこれを大胆に、「大事な部分だけを訳す」という省略の導入によつて、発言者のスピードに対処できたのである。「完訳」ではなく「抄訳」で構わないということである。その際に大事な情報はしっかりと伝えること。それがこの文章の中で、最も作者が強調したかったことといえる。

問三 理由説明の問題。徳永師匠の戒めが、作者にとつてどうして「感謝」の理由になったのかを明記する。傍線直後に「というの」とあるので、以下が直接の理由説明に相当していることはわかる。作者の語り口がかなりスローモーであることが、問題となっている。しかもペースを上げることが作者にとつては不可能なのである。最後の三行が具体的な対策になっている。すなわち、省略して訳すという技術。ただし大事な情報は落としてしまつてはならない、ということ。問二と記述が被ってくるが、これは国公立の記述ではよく見られることで、かといつて勝手に被っている部分を省略してしまつていいというものではない。設問が要求している指摘箇所をしっかりと把握して、そこが他の設問と被るようであれば、言葉を巧みに同一語の使用を避けて記述をする。最後の三行のなかで「情報量は減らさないこと」「大切な情報を落としてしまふようでは困る」とあるので、これを問二、三の両方の記述にそれぞれ振り分けた。まったく同一の記述は避けること。

## III

### 【口語訳】

どことなくひっそりとした勤行の合間に、昼頃、姫君のお部屋にいらつしやつたところ、宰相の乳母や侍従など二、三人ほどがお仕えして、昔の(北の方のこと)などを話に出しているのだろうか、皆しよんぱりとして(外を)ぼんやりと見ている。姫君は小さい几帳を引き寄せて寄り添って横になりなさっている。年の程よりもこの上なく大人びて、母上のことをいつまでも思い嘆きなさっているためであろうか、少し顔がやつれなさっているのがこのうえなく(魅力的に)見えなさる。濃い鼠色の細長を重ねて着なさっているのが、かえつて優美で格別に優れている。前斎宮からお手紙だといつて来ているのを見なさると、薄紫の色紙にとてもこまごまと書きなさつて、最後に、

植ゑおきし……植ゑておいた垣根が荒れ果ててしまつた撫子の花を、今はいったい誰がしみじみと見るのだろうか(可愛がつてくれた母上が亡くなつてしまつて、これからはいったい誰かあなたの面倒を見るのでしょうか)。



とある。(内大臣が)「この返事を早く(お書きください)」と催促申し上げなされると、(姫君は)ますますきまりが悪そうに思っているけれど(内大臣は)筆を取って準備して、御厨子にある薄い鼠色の色紙を取り出して書かせ申し上げなさる。ご筆跡なども将来(のますますの上達)がおのずと想像されて、とても見がいがあって美しい。

垣は荒れて……垣根が荒れ果てて見に来るひともいなくなったなでしこ花の露がこぼれるように、かわいがってくれた母が亡くなって言葉をかけてくれるひともいなくなってしまう私は、寝ても覚めても涙を流していることだ。

### 【各問解説】

問一 傍線部解釈の問題。逐語訳で構わないが、主語や目的語は必ず補うこと。指示語があればその指示内容を明確に書くこと。

「この返しとく」という会話を誰が、誰に向かって言っているものであるのかを、まずとらえる。「こ」という指示語が指し示しているのは、直前の前斎宮の「和歌」である。「返し」とは「返歌」であり、「とく」は重要単語「疾し」が連用形に活用したものである。「早く」と訳せる。前説にあるとおり、内大臣が幼い娘の部屋を訪れ、「この歌の返事を早く」とうながしている、のである。

これだけで解釈が完成したとはいえない。「早く」の下に「省略」があることに気付かなければならない。「早く書きなさい」「早く出しなさい」と、命令口調で言葉を補うことを忘れないこと。できないと減点の対象となる。

さらに、「つつましげに」は重要単語「慎ましげなり」の連用形で、「気恥ずかしそうに」と訳せる。「思し」は尊敬語の動詞、「思す」の連用形。「お思いになる」と訳す。

接続助詞「ど」も訳し忘れないように。逆接の意味で、「〜だが」と訳す。

問二 傍線訳の問題。問一と同様、逐語訳で構わないが、こちらのほうが前後の文脈からの類推力を要求される内容になっている。「手」は古文常識語で、「①書道 ②筆跡

③楽器の弾き方」の三つとも覚えておこう。ここでは②で、姫君の筆跡(字体)のことが言及されている。「御」を訳し落とさないこと。これは尊敬語なので、姫君に対する敬意になっている。「行く先」は「行く末」ともいうことが多く、「来し方行く先」の形で「過去と将来」と訳せる。頻出する慣用表現である。「思ひやる」は、やや訳しにくい。が、「想像する・推察する」の意味。助動詞「れ」を訳し落とさないこと。「る」の連用形で、自己の心中語に付いて「自発」の意味となる。「自然と」の訳語を加える。

やはりこの問題も省略がある。姫君の将来が、いったいどのようなものだと思像されるのか。傍線直後「いと見まほしくうつくし」がヒントとなる。「まほしく」は願望の助動詞「まほし」の連用形。「うつくし」は重要単語で、「綺麗だ・すばらしい」の意味となるので、姫君の将来を、「楽しみである・成長ぶりがうかがわれる」といった言葉を補って記述しなければならない。

### 問三

和歌の解釈の問題。和歌は何よりも、「自然の風物が、何の(あるいは誰の)象徴か」を把握することが肝要である。「雨が降っている」だったら「私は泣いている」というように。前斎宮の歌に対する返歌なので、前斎宮の歌の意味内容を踏まえた上で解釈する。「垣は荒れて」が北の方の死をたとえ、「とこなつ」は「なでしこの別名」と注にあるので、姫君のことだとわかる。「なでしこ」は「撫でし子」、つまり「可愛がっていた子」を表す、古文常識語で、受験生は覚えておかなければならない。「置き臥し」は、「起きたり寝たりすること」、転じて「朝夕、日常の暮らしでいつも」という意味。「露」がこの和歌の中では最も重要で、「①涙 ②人の命・はかないものの象徴」という意味で和歌には頻出となる。ここでは「こぼるる」という記述から、①だとわかり、「姫君の涙」と解釈する。「起き臥し」の「起き」は、露が「起き」との掛詞。露が葉の上に乗ることを、「置く」という。「置き」「露」「こぼるる」はそれぞれ縁語の関係となる。掛詞や比喩(象徴を解釈する上で大切なことは、かけられている、あるいは例えられている二つの意味を、「二つとも」訳すことだ。すなわち、「露ぞこぼるる」でいうならば、「露がこぼれるように私の涙もこぼれることだ」というように。その際、「ように」という言葉を補うとスムーズに訳せる。

